
espionage+1

春風ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

espionage + 1

【Zコード】

N1468A

【作者名】

春風ななこ

【あらすじ】

主人公の香鈴は、姉との平和な暮らしをしていた。しかし、あの1本の電話で香鈴は、スパイに・・・!?

第0章* プロローグ

No . 1 prologue .

11・14PM 9:55。ガーデンハイツ704号室 青山マキ宅。
プルル、プルル。電話が鳴った。

「はい、ええ。」

受話器を取つたのは、青山ではなかつた。

「今、済みました。」

受話器を持つてゐるのは、私の姉だ。

「はい、分かりました。それでは。」

ガチャッ。姉は受話器をおいた。そばにあつたジュラルミンケースを持ち上げ、私に声をかける。床には、あおむけになつて青山が倒れていた。寝ている様だ。。。。そして、私と姉は、この部屋をあとにした。

その7ヶ月程前 . . .

私の名前は、日野香鈴。17歳の高校2年生。両親は田舎について、姉の由来と、二人で暮らしています。姉は、26歳で、大人気雑誌『MIRUKI』の記者。

しかしあの「ぐく普通の暮らしが狂つたのは、

あの1本の電話だった。

第1章 T e 1 . . . (前書き)

留守番中にかかつたT e 1。どう見ても不審な感じー・どうなる香鈴
!?

第1章 T e 1 . . .

日曜日の朝。6円りしへ、朝から雨が降っていた。

「お姉ちゃんも仕事を？」

玄関でハイヒールを選んでいる姉に、文句を言ひ。

「ううよ。×切り前で忙しこの。ま、なるべく早く帰るよ」といふ。

から。」

「分かつた。オムライス作つといふか。」

姉にバッグを渡す。

「ありがと。そういうえば、トイレットペーパーきてたから買つといで。」

「はい。じゃあね、いつてらしゃい。」

姉は、ハイヒールを履くと、忙しそうに、いつてきます、と黙つて出掛け行つた。

朝ごはんを食べ終えると、食器洗い機に食器を入れた。自分の部屋に戻り、宿題のレポートを書く。友達の千佳から、レポートを一緒に書く約束をしていたので、メールをしようとしたが、携帯を学校に忘れているのに気付いた。

「はあ。最悪。」

そのとき、リビングから、電話の音がした。

「はー。」（名前は後から名乗るようにしてこむ）

『日野香鈴さんですか？』

「え、ええ。」

いきなり言われたのでびっくり。しかも、知らない男の人。

『明日の19時、香鈴さんの通つている高校の西門に来て下さい。』

「あの、よく状況が分からんんですけど。」

『いいからきてください。』

一方通行の会話に、スゴク戸惑つた。

「あの、多分来れないんですけど。」

てゆーが、怪しい。

『それでも来て下さい。』

「あの、お名前は？」

『ああ、すみません。徳竹と言います。』

知らない名前。切つて良い電話と言つのは、こうこうの電話のことだろ？。

『あの、日野さん……。』

ガチャン。受話器をおいた。少し怖かった。だつて、もしかすると、オレオレ詐欺みたいに、来て来て誘拐みたいな電話だったと思つ。

『もしもーし、』

ああやだ。徳竹の声が空耳で聞こえてくる。

『か、り、ん、さーん？？』

待てよ、今のは、空耳じゃない。まさか。そんなはずはない。私は、恐る恐る受話器を取つた。

『もしもーし……。』

『アハハハ。切つても無駄ですみ切れませんから。』

徳竹は、嬉しそうに言つ。

「何したのよ！！」

本当、何をしたのか？

『ちょっと一工夫。ハハハ。ま、明日、会いましょうと申つまで、切らせませんけどね。』

『絶対、嫌よ。会うもんですか。』

怒り任せに、電話のコードと、回線を引き抜いた。ブツツ。ツーッ

ツー。電話は、切れた。

「切つて、キレマスよ。」

時計を見た。10時……。

「やばい！！」

友達から、電話がかかってくるのに。徳竹と言つ男のせいで、電話線をつなぐのが、今まで生きてきた中で一番の恐怖を味わせた。手が震える。落ち着くんだ、何度も言い聞かせる。そして、震える

手を押さえながら、コードと回線を差した瞬間、電話が鳴った！！

渋谷のオフィスビル。姉の由来は、コーヒーを飲んで一息入れて

いた。そんな時に、電話が鳴った。

「はい。」

『「こんにちは。』

「こんにちは。えっと。どちら様？」

『徳竹と言います。』

由来は、自分のデスクから、取引先名簿を調べる。

「すみません、名簿にないのですが。どちらの徳竹さんですか？」

『e pgの徳竹です。』

由来は、それを聞いて、携帯を落としそうになつた。

「何で今頃 !！」

Tel . 2 (前書き)

留守番中にかかってきた寂しい電話。一度切ったのにーー!また鳴り響く電話。はたして、電話の向いにいるのはーー!?

香鈴は凍り付いた。足に根が生えているみたいに。取るべきか、切るべきか。

「どうしよう。」

電話は鳴り響く。手が震えた。心臓は、破裂寸前！

「はい、もしもし。」

私は、ほとんど無意識の状態で受話器を手にしていた。全身が小刻みに、ガタガタと震える。受話器の向こう側にいたのは、

『もしもし？ 香鈴？ おーい。返事しろー。』

友達だった。

「はあ。」

息切れしていた。

『だいじょぶ？？』

「う、ううん。だだだ、大丈夫。」

『本当？ 息切れして、かなり動搖してるぞお？』

『ははは。何でもないさあ。』

苦笑。

『今日の12時ね。いつものカフュで。真奈美も来るつて～。』

『わかった。お昼に、いつものとこね。』

『マジで、だいじょぶ？』

「うん。はあ。大丈夫。じゃあね。」

『うん、バイバイ。』

受話器をおいた。床に座り込んだ。ガクガクと全身が震えた。

『うひ。怖かったー。』

しばらく、私は立てずにいた。

その頃 - - - -

姉の由来の携帯にかかつってきた電話。

『何で今頃！！』

『ま、色々とね。先輩。』

電話の向こうには、徳竹がいる。

「で、何の用？ま、聞かなくても分かるけど。」

『さすが先輩。』

「今すぐ切つて。香鈴をE.P.G.にやるつもりはないもの。」

『それは残念。後日話しましょう。先輩。では。』

電話が切れた。由来は、大きなため息をついた。なんでこんな事になってしまったんだろう。由来は、そう思つた。E.P.G. . . . 香

鈴は、この組織のせいだ、人生を左右されてしまう . . . 。

「はあ。どうしますよ。」

由来は、ため息をつくばかりだった。

Tel · 3 (前書き)

注意 : espionage + 1 です!!

12：00。私は、千佳と約束していたカフェに着いた。雨が静かに降っていた。カフェに入ると、千佳が手を振った。

「ごめん。待つた？」

「いや、真奈美の方が遅いもん。それに、正午ぴったり。

「あはは。」

私の癖は、約束の時間ぴったりに来る事。私は、店員を呼んで、飲み物を注文した。

「今日、冷えるね。」

千佳が、温かいコーヒーを飲みながら言った。

「最近雨ばかりだもんね。」

私は、アイスコーヒーを飲んでいた。

5分後 . . .

店のドアが開いた。

「『メーン。待ちましたか？』

真奈美がようやくやってきた。

「かなり待つたヨ。」

千佳が、腕を組んで、偉そうに言つ。

「大丈夫だよ。10分ちょいしか待つてない。」

私は、時計を見ながら言つ。

「香鈴、眞実を明かすなよ。ま、いいか。さあ、三人揃つたところで。」

千佳が立ち上がる。

「行こうか。」

私も立ち上がった。

「いらっしゃい。」

千佳の家に着いた。おばさんが、ドアを開けてくれた。

「おじやましまーす。」

真奈美と一人で言つ。

それから、レポートを見せあい、悪いところを修正した。

「そういえば、香鈴。なんで、電話した時、動搖してたの？」

私は、理由を話した。

「そうですか。こわいですねえ。」

真奈美が言つた。

「あんた、姉妹で美人なんだから、気をつけなよ。」

「うん、ありがと。」

それから、家に帰つた。

「あ、トイレットペーパー……。」

私は、近くのスーパー・マーケットに行つた。

ガサツ・・・・・

氣のせい？背後から物音が、した様な氣が。なるべく急ぎ足で、スーパーへ。安いトイレットペーパーを見つけると、すぐ買った。氣配を消してる・・・・。

「なんにもない。」

私は、走つた。真つすぐ家には帰らなかつた。氣配が消えるまで、町内を回つた。

Tel. 4 (前書き)

香鈴^{かりん}と姉の由来^{ゆき}にかかつてきた、ちょっと怖い電話。徳竹つて一体。
・?
?

家に帰り着いた。徳竹 . . . 。何度も頭をよがれる夕前。

「なんでもない、誰もいない。」

恐怖のあまり、膝が震え、玄関の地べたに座り込む。ストーカー？
にしては、巧妙な手口。私は、涙をこらえた。泣くなんて。

「怖い。」

ただ、何度も恐怖がおそってきた。

夕食の頃になると、恐怖心は、少し冷めていた。思い出せば、かなり怖いけれど、必死にやる事を見つけた。気を紛らわしたい。姉はくたくたになつて帰つてきた。おいしそうに私の作ったオムライスを食べた。

「ああ、疲れた。やつぱり香鈴の作ったオムライスが、一番だわあ。

「姉が、いつもの2倍早く食べ終わつた。

「今日、食べるの早いね。」

私は、流しに食器を持つて行つた。食器を簡単にすすぐ。

「はあ、本当に今日は疲れたわあ。」

姉は、リビングに行き、自分の作った雑誌の出来具合を見る。独り言で、こここの文を作つた後輩が、なんだか良くないなどと言つていた。

「コーヒーいれよつか？」

「うん、ありがと。」

うちのコーヒーは、サイフォンでいれる。クッキーを添えて、リビングへ持つて行つた。姉が、コーヒーを一口飲んで言つた。

「香鈴、徳竹万里から電話があつた？」

「トクタケ . . . 」

「そう、香鈴を必要としてるからね。」

「お姉ちゃん、何の話？」

もしかしたら、ものすごい事なかじら？姉の表情が普通ではない。
見た事ないくらい本気なんだから。

「香鈴、明日、徳竹万里に会いなさい。」

「えっ？お姉ちゃん、なにが言いたいの．．．．．？」

私は、コーヒーを落としそうになった。

第2章* そこのカフHですか。（前書き）

「」の題名の意味は、「」の回で、明かされますーー！

第2章＊ そのカフェです。

学校が終わった。期末考査が近いので、部活もなく、まだ明るい道を帰っていた。大通りで、店がいくつか並んでいる、にぎやかな道だ。新しく建つたモダンなカフェを横目でちらりと見た。

「ああ、今度行こう。」

かわいい看板には、「コーヒーの配達もしてくれると書いてあった。私は、頭の中でコーヒーを飲んでいる自分を想像してみたりした。

．．．

携帯が鳴った。画面には、「オネエチャン^ v ^」と、表示されていた。

「もしもし？」

『香鈴さん、どうも。』

へつ？？？私は、耳を疑つた。

「え．．．つ。とつ徳竹さん？」

『おお～、分かつたんですか。そうです。徳竹です。』

「今、どこからかけてるんですか？」

『そこのカフェです。』

ええええ！！！私は、またまた、耳を疑つた。

『どうかな。おごるからさ、お茶しない？』

「あの、え、あんの、ん、つ。」

姉の意味深な、昨晩の言葉がよみがえってきた。「徳竹に会え。」

姉は、理由なんかを話してくれなかつた。ただ、本当に真剣な顔で、徳竹に会いなさい。ただ、それだけを何度も言つた。

「あの、徳竹さん？」

ツーツーツー

電話は切れていた。チツ、と舌打ちした。

「あー、だー、もつ！！会えば良いんでしょ、会えばー！」

私は、数メートル後に戻り、カフェに入つた。

「いらっしゃいませー。」

明るく店員が、笑顔で迎えた。

「いじだよ。」

店内をきょろきょろと見渡す私に、少し聞き慣れた声がした。窓側で、一番端の、良い席に、若い男の人がいた。姉と同じ年くらい。

「ああ、あの人か。」

性格がよさそうな、とてもなく普通の印象の人。さて、何を話すんだろう。

私の席に、おいしそうなケーキと、キャラメルアイスコーヒー（キャラメルカフェモカ）が、来た。徳竹さんは、紳士的な人だった。

「えっとね、何か、由来から聞いた？」

「い、いいえ。何にも。」

「そつかー。説明するのもなんだかね。」

「ちょっとヒソヒソ話すけどさあ、单刀直入に行つても良いかなあ。」

「はい、全然良いです。」

私は、ストローをたてた。

「香鈴さんに、EPGへ、行く事を頼みたい。」

「いーぴーじー？」

「そう。esponaga。」

「エスピオナージー？」

いきなりエスピオナージなんて言われてもねえ。

「アメリカは、CIA。ロシアは、KGB。さて、何の事?」

「C . . . ス、スペイ。」

徳竹は、うなずいた。

「えつ??!!」

「スペイーッ!!!!?」

「どんなことが、まず、説明しないとね。」

「はっ、はい。」

徳竹は、EPGの事を語りはじめた。

セレカジノです・・・（前書き）

「お話では、

『EPG』や、『徳竹さんと姉の関係について』の謎がついにあかされまく…なんとなーくアクセスした方は、プロローグから見ていただく事を、おすすめします…！

そこにカツヒです・・

徳竹は、まず、IJのEPGの歴史について語った。

「日本には、スパイの団体は、無いと思われてたんだよね？」
「はい、私もさつきまで。」

「……第一次世界大戦。日本は、敵の動きを知るために、スペイの部をもつけた。当時は、横文字を使ってはいけなかつたので、『日本帝国国軍軍事忍知部』と、言ひ長い名前だつた。（にほんていこくぐんぐんじにんちぶ）略されて、ニッティ軍、なんて言われていた。

ここまでが、設立のわけ。

「……1950年代。秘密情報収集活動を、英語に直し、今の『espionage』に。なんとなく、いや、いつの間にか、略されて、『EPG』に。いろんな国のスパイ活動や、”裏”の犯罪の取締に務めた。今の任務の原型が出来た。

「と、まあ、こんな感じ。」

「あの、その事は、理解できたんですが、姉との関係は？」
「ああ、お姉さんね。僕の先輩だよ。」

先輩・・・？

「つて事は、お姉ちゃんは、いつから勤めているんですか？？！」
「たぶん、育成部の頃だから、8、9才の頃じゃないかなあ。」「えええええっ！！」

小学校2、3年生の頃だよ。すうしょ。

「天才だって、言われたんだよ。当時の呼び名は、えつと、偽名が、『神無』って言われてたから、なんだっけ。
『神無』か。目立つ名前だよ？？」

「思い出した！――『出雲の天女』だよ。」

凄いあだ名だなあ。

徳竹さんは、話易く、1時間程話こんだ。

「スパイか。悪かないかも？」

そんな事を思いながら、家路に着き、ゆっくりと歩いて帰った。

そこにカツエです・・・（後書き）

良かつたら、感想下さい。

b ゆ春風ななこ

そこのかつてです・・2（前書き）

「」のお話でも、物語の秘密が明かされます！
なんとなーくアクセスして下さった方へ、プロローグから読んでいた
だきたいです。

そこのかつてです・・2

19：00。雑誌の〆切りも終わり、次の取材テーマも決まつた姉は、笑顔で帰宅した。

「ただいまーっ。」

「おかえり。今日、帰つてくるの早いね。」

私は、食事の支度をしていた。

「香鈴もじやない。部活、どうしたの？」

姉は、上着をハンガーにかけた。

「期末考査で、部活停止なんだよ。」

「そつかー。で、先にお風呂入るわよ。」

「どうぞ。」

21：00。見たい月9ドラマを我慢して、期末考査の勉強に励んでいた。英語の勉強が、一段落ついた。

「かりーん、ケーキいるー？」

1階の方から、声がした。（2階付きマンンションなのだ。）

「いるいる。」

私は、階段を下りた。リビングには、姉が、コーヒーを飲みながら、ケーキを食べていた。

「おいしそー。いただきまーす。」

いちごとチョコが美しくカット＆デコレーションされたショートケーキは、口の中でとろけた。なんて言つのかな。とっても、クリームとの相性が良い。

「香鈴、今日、徳竹に会つた？」

「ん、む、うん、会つたよ。でもさあ、後々よく考えたんだけどさ、嘘つぼくない？」

「でも本当です。」

「女子高校生をだますなんて、あまいよ、お姉ちゃん。」

「んじゃ、嘘だと思つなら、明日、ここへ行なさい。姉は、小さい名刺のような物を出した。

「赤坂駅 6月10日 am 2:00 集合。」

「はあ？ 明日って言つより、今日じやん。」

もしかしたら、スパイって本当にれる物なのかもしない。

「香鈴、スパイになれるって舞い上がるかもしれないけどね、最初に釘さしとくよ。」

「うん、わかった。」

「香鈴は、スパイって聞いたら、どんなの想像する？ スパイって言つたら . . . 。」

「かつこいい最新器具があつて、毎日バンバン銃撃戦！」

「はあ。これだから。」

何よ。

「ま、最新機器があるのはひていしないけどね、毎日バンバン銃撃戦はちよつと . . . 良い機会だからいつとくけど、もし香鈴が、スパイになつたとするでしょ。」

「うん。」

「銃撃戦は、すぐ死体を作りかねないわ。あなたの仲間、敵。死体の処理には手間がかかるでしょ？」

「確かに。だつたら、即効で聞く毒薬は？」

「だーかーらー、その場で死なれると困るつて事。」

「じゃ、後で効果がある毒薬だあ。」

「正解。こんなチマチマした、せこい世界が、スパイの本当よ。でもね、その、チマチマした内容は、とても念密な計画と、第一の皮膚の様に、しつかりと身についた、スパイの勘と、知恵と、嘘。こんな難しいのがスパイ。」

「何か、やる気失せてきた。」

「ま、後は、香鈴の好きにしなさい。」

姉は、またコーヒーを飲みはじめた。私は、ケーキを口にしながら
考えた。

選択できるのは、二手。

S P Y o r . . .

そこのかつてです・・2（後書き）

もしよろしければ、感想、書い頂ければ、幸いです。

第3章*T a r a g e t o f opportunity(前書き)

今日は、長いです！！心して読みたまえ！！（ーーー）

今回のなが～いなが～い題名の意味は、CIAのスペイ用語で、日本語に直訳すると、『目標機会』英語読みで、『ターゲットオブオポチュニティ』意味は、後書きの方に。。。

ねむい。午前2：00。だいたい、なんでこんなとこに呼び出すんだろう??

一
正月の風物詩
年始の風物詩
正月の風物詩

私は、鼻をすする。駅は、当然閉まつており、雨がザーザー降る中、寒い寒い深夜の駅の軒下で、高校一年生の（可愛らしき）女の子が一人で待つてゐるのだ。まったく。世の中物騒なのに、何故こんなに待たせるのか？

ティッシュスーパーで、鼻をかむ。時計は、2・08を指している。

駅前のロータリーに、一台の車がやつてきた。私の目の前に、見事に停まつた車のウインドウが、音もなく下がり、中には、徳竹さんがいた。

「まへ」

まあ、この場面を見た人は、誘拐とか、夜中に兄が迎えにきた、なんて思う人が大半でしょう。でもね、どちらの答えも、不正解。今から私は・・・

車の中は広かつた。家族がみんなで乗れるような大きい普通車で、外見は、黒いメッキがギラギラと光を放つ車だ。

ごめんね、8分も遅れてしまつたよ。

「まけ！」まかいそお！！！8分位、全然OK！！

私はそれだけ言つておいた。それにしても、徳竹さんの車は高級な
のかしら？ それとも深夜のせいのかしら？ 何だかとっても眠くなる
のは一体 . . . ? ? ?

．．．．．

「いひ、香鈴！…」つまで寝てるの…学校遅刻するよ…」

気が付いたら、自分の部屋だ。姉が、母親と同じ口調で、私を怒鳴つて起こした。

「えつ。。」

昨日（ほぼ今日）のは、夢だったのかなあ？そんなふうに思つたのだけれど、自分の髪の毛には、ヘアゴムとヘアピンがしてあった。テスト勉強して寝れば、そんな事はよくある。それから、自分の服装を見た。パジャマじゃあ、ありませんなあ。

「香鈴！！本当起きて！！」

「はいはい。」

まだ30分もあるのに何故そうせかせかと毎朝起こすのかね。私は、マッハで着替えると、教科書ノートをバックにつめた。もう、夢かなんだったのか、なんて思う暇もなく、学校に出掛け行つた。（もちろん、朝食は食べたよ！）

「おはよお、かりんたん。」

千佳が、私を発見して声をかけた。

「あ、おはよう。」

一人で一緒に朝日が照る道を進んで行つた。

昼休み。千佳が、弁当とともに私のところへ突っ込んできた。

「大変大変！…」

私は、真奈美とお弁当を食べていって、真奈美も私も、びっくりした。（いきなり頭から突っ込んでくる人は早々いない。）

「どうしたんですかあ？」

「どうしたの千佳？？そんなにあわてて。」

千佳は、勢い良く立ち上がると、携帯を私の目の前に持つてみせた。

「みずくさいぞお。かりんたん！…」

「？なんのこと？？」

千佳の携帯じゃないようだ。

「それ、誰の携帯ですかあ？」

真奈美がすかさず聞いた。

「あ、これは、隣のクラスのR子ちゃんの物。」

「涼子ちゃんですかあ？」

「ドッキ、グサツ、ギックリ。」

「図星だな。」

私が言つた。

「んまあまあ。そんなことは、どうでもいいでしょ。コレ見てよ

コレーー。」

携帯をせりて顔に近付ける。

「あああーー！」

真奈美が声を上げた。

「新しいカフエーーー！私も行つた事無いのにーーーいいなあ。」

千佳ががっくりした。

「見るとこ違うよ。香鈴の隣にいる人ーーー！」

「あああーーー！」

また真奈美が声を上げる。

「コレは、属に言つ、カレシと言つもんですかねえ。こんなイケメンの彼氏とどこで知り合つたのかなあ。香鈴さん。」

「ええ、これはその。。。

今、気付いたが、イケメンだな。確かに。

「いーいーいー、いとこだよ、ほら、いとこのお兄さんーーー！」

口からあ でまかせえ

「ほんとに？」

「ほんとですかあ？」

「ほんとですう。」

千佳が、舌打ちした。携帯をポイッとほうりなげた。

「なーんだつまんなあい。彼氏いない歴…17年の香鈴についてにーーーと、思ったのに。」

「余計なお世話じや。」

こんな感じで、今日の学校も無事終了。

)

携帯画面の表示を見た。

「はあ！？何コレ！？」

「トクタケサン▼^0^▼」と、出ていた。

「はい、もしもし。」

やつぱり昨日のは、夢じやなつかたみたい。

第3章*T a r a g e t o f opportunity(後書き)

『目標機会』の意味。

情報部が、部員に情報を伝達する情報が、相手国政府当局（敵側）から、かなりの偶然でおいしい情報が入ったときの様子を表します。しかし、今回のお話では、日本語読みのままで、目標（香鈴）と、部員（徳竹）が、近く機会が増えた事を言っています！

Target of opportunity · 2 (前書き)

結構短くなりました！！いつも読んでくれてる方、本当に、ありがとうございます！

『電話の向こうでは、やつぱり徳竹だった。

『香鈴ちゃん、昨日は『めんねー。』

「えつ？あつ？？はい？？」

何の事がよく分からなかつたが一応、返事しといた。

『昨日は、僕の車だつたから、本部への道程を知られない様に寝むらせりやつたんだけど、香鈴ちゃんが本当に寝て起きなくなつちやつて……。』

ちょっとまてよ……。謝るのはじつちの方のような……。

『いいえ、とんでもないです、『めんなさいーー！』

『で、まあ、それは良いとして、アレ、見た？？』

アレとは何だらうか？いいえと答えた。

『そ、じゃ、今日中に田を通しといてね。』

「は、えつー？あのつもしもしーーーーー？」

切れてる。まだよ勝手にかけて、勝手に切つて、スパイっぽく、着信履歴のこさないし。電話もきつて、私も切れさせるつもりから。(=――) イライラ。

家に帰ると、私の机の上には、小包があつた。とつても小さくて、ノートよりも小さかつた。重い

全体に、メッキがしてあり、ギラギラ光るジュラルミンケースのようなのノートパソコンだつた。小さい『ピルキー』と、書つデータファイルがあつた。名前は知らなかつたけど、それに書いてあつた。尖つた針の様な先を横の穴にさした。

「データーファイル シヨリ中・」

電源も入れてないのに勝手に動いた。

「何があるんでしょう？」

私は、少し期待した。何があるんだろう？何が出るんだろう？

【】

面は、電子信号を繰り返す。

第四章* Novator!（前書き）

今回は、簡単な、文章です。

題名の意味を紹介。『Novator』とは、革新者と、言つ意味。ロシア（KGB）のスペイ用語で、外国で募集したエージェントで、今回のお話では、香鈴ちゃんが、才能のあるエージェントだと書いた事を示しています。（読み：ノバートル）

第四章* Novator!

「ノンデルターノ」の画面。

i00011a yx10hd100000101jsufz1010p
dubx1010101010 . . 01ghhco1p1a10 . .
10ggd101010101 . .
101010111110ia . . . kdisabam . .
.
1010aidhdd11dqecbnz . . 10101iwdh
hch19 . . akjd10
dion1010fukuokaa1010
.
1010100011hdhcchaussif . . j11010
. .
1001010dhg . . . fw hdbnkakjd101 .
. . 10akjdy
.
101010100010100001jndg 100
u . . shui1010
s jahjy10bz1pjnddf10101010yaus11
0110jj
.
こんな複雑な電気信号が、1や0にかわり、意味のない文字を何度も何度も繰り返す。黒い画面に、明るい黄緑色の文字が、目まぐるしくかわっていく。時々、点滅する文字が、3秒くらいでて来た。何度も何度もかわってゆく。

こんな複雑な電気信号が、1や0にかわり、意味のない文字を何度も何度も繰り返す。黒い画面に、明るい黄緑色の文字が、目まぐるしくかわっていゆく。時々、点滅する文字が、3秒くらいで来た。何度も何度もかわってゆく。

大きな電子音がして、数秒間、フリーズした。

「 I s y o u a r e K a r i n H i n o ? 」

Y e s .

N o .

こんな画面にかわった。あなたは、日野香鈴ですかって、もちろんそう！すぐに、” Y e s ” をクリックした。ダウンロードされた、画面には、たいした事は、書いていなかつた。

* ヒノカリン

P W : 1 7 - Z V X G - 2 9 1

アス、アカサカエキニキナサイ。
パソコン、ヒツキヨウグ、ジサン。
クンレンヲシマス。

訓練をするようです。受けて立とうじゃない！

第四章* Novator!（後書き）

次回は、CIA（アメリカの中央情報局）のスパイ用語を紹介したいと思います。（毎回アルファベット順に。）

Novator! 1 (前書き)

香鈴が、ついに、スペイの訓練所に行きますーー！

深夜十一時。同じ駅前のロータリーには、徳竹の高級車はこなかつた。少し凹んだ汚いワゴンが一台私の目の前に音もなく止まる。

「ヒノカリンか？」

強そうな女人人が、窓を開けて、車へ向かってきた私に聞いた。

「は……はいっ。」

「乗れ。」

反応の早い人だと言う印象を与えた。私は、その人のスピードについていこうとした。なので、急いで車に乗り込んだ。乗った瞬間に、車が動きだした。ドアは、まだ閉まつてなかつたので、びっくりした。運転手もこれまた気の早そうな人だつた。スパイの人つて、こんなにも、何か、つめたすきつて言うのかな?なんかさつぱり。。「窓には寄るなよ。訓練所は、秘密基地だから、スパイのお前に知られたら、いけないんだ。」

女 사람은、また無愛想に言った。

「なんで、同じスパイなのに、隠したりするんですか?」

説明が嫌いな人のようだ。『チツ』って舌打ちした。

「もしも、スパイが任務に失敗して、敵に捕まつたと仮定するんだ。」

「はい。」

「そこでだな、もしも、訓練所がどこかと問われるだる。もちろん、手には、嘘発見気がかけられている。どこかと問われても、道も知らないんだから。嘘発見気には、引っ掛からずに、自分の命も助かるチャンスの糸口にもなるんだ。」

「あ、ありがとうございます。」

だからか。と、納得。窓には、カーテンがしてあつた。運転席も見えない様にしてあって、はつきり言って、あり得ないくらい、真つ暗な車内なのだ!

「なんか喰つか？」

言葉遣いの悪い女の人のね。まるで男の人みたい。

「いいえ。」

「そう。」

しばらく沈黙が流れた。マジで気まずいですわーー（ザマスロ調。）

さて、この気まずい雰囲気の中、私は、どうなるのでしょうか？

No v a t o r ! - 2 (前書き)

香鈴は、美人でボーカル・シユな女の人の隣にいて、会話がないまま重い沈黙が流れてます。。

だいたいなんでこんな無愛想な女の人の横なんだろ？・美形なんだけど、どこか、オーラが違っている。何というか、はつきり言って少し怖い。

長い沈黙。

なんで、黙っているのだろう。私もその人も。話しかけても怒られそうだし、話さなくては、気まずいし。どうしよう…どうして。どうしよう…どうしよう…どうしよう…こんな気まずいのは、人生で生まれて初めてだ。ききたいことは、たくさん…お前に、聞きたい事が、たくさんあるのだが。」「は、はいい？？なんでしょう。」「ひのゆきの妹だよな？」

田野由来って、私の姉だけど、スパイの人って、コードネーム使うんじゃなかつたけ？ま、いつか、そんな事気にしてたら、気まずいし、怖いし。

「はい、妹です。」

女的人は、うなずいた。

「そうか。あの天才と言っていたスパイの妹か。お前の活躍が、楽しみだ。」

ほんの少し期待しているようだ。

「…」

少しだけ、空気が和らいだ気がする。車はどんどん進み、一旦停車して、人の話し声がすると、また進みだした。高速に乗ったのだと分かった。何所までいくのだろう？

「あ、あの。」

「？ なんだ？」

「姉が、どういう事をしていたか、よく話してもうつてないんですけど、知っていますか？」

少し顔をしかめる。

「私だって、親しいわけじゃないし。でも、記録を打ち立てる度に何度か、噂を耳にした。人の過去を詮索するもんじゃないとは、先に言つておくが、お前が知りたいのなら、どうだってできる。」
聞かない方が良いのかな？

聞きたい。

自分の欲は、そんな風に出てしまつている。

聞かない方が。。。

直感は、そう言った。

「良いです。聞きたいです。話して下さい。」

答えは言った。

「うん、そうか。どこから話せば良いのか。」

私が、もうすぐで聞き落とすぐらいの小さい音で、舌打ちした。やつぱり怖い。ため息をついて、数秒間黙つたままで、やつと言葉を見つけられたらしくて、やつと語り始めた。

「おまえ、姉の入った理由なんかは？」

「入つてた事以外何も知らないんです。」

うんとうなづいた。

今から、ちょうど、20年前。姉の由来は、6歳。

「いき、お遣に行つてきてちょうだい。」

「はあーー。」

もうすぐで、一年生になる頃だった。

e ロ ル 内では、優れたスパイの不足に悩み、子供の育成に目を向けていた。年齢は、今年、7歳になる子供達。由来も、その中の一人ゲットだった。

「いつてきます。」

由来は、商店街へと向かつた。パンをかつて、ももいろ通りをぬけて行く。

「あのこかあ。」

由来の後ろで、誰かが笑った。

ザツ
・
・
・

「えつ。」

由来が声をもらした。次の瞬間、

Novator!-3（前書き）

幼き由来は、どう誘拐されるのでしょうか？6歳にして、冷静沈着な由来。ここからスパイの本能が伺えるかも？！

気が付くと、車の中に放り込まれていた。暗いトランクの様なところに押し込められ、息もじづらい。だいたいなんでこんな田に遭わなくちゃいけないんだろう？幼い由来は、そう思った。

「急げ。怪しまれると難だからな。」

「はい。」

そんな会話が、向こうから聞こえてきた。手足は、自由なのに狭くて寝返りをうつくらいがやっとだった。車が一旦停車した。

「横断歩道のメロディーが聞こえた。ここは、町中のようにだ。人の声も多々聞こえる。たぶん、ここは……。」

「うわっ！－！」

もう少しで思い出すところで、車が急発進した。由来は、思いっきり頭をうった。車は、どんどんスピードを上げる。トランクの隙間から、町がもうスピードで、後ろへ駆けてゆく。由来は、6歳にしては、とても冷静だった。泣くも喚くもせず、黙つて、静かに自分がどのような状況で、どんな事になっているのか冷静に分析し、自分が助かる事を考えた。

「多分私は、怖い人に誘拐されているんだ。」

独り言を呟いた。

「あの町は、みつつの駅だから、しばらくいっても、今持つているお金で十分帰れる。」

お遣いのお金を、手だけで確かめた。

「ギザギザ。つるつる。おおきい。」

多分由来の予想では、874円は残っていると予想した。（正解。）

「コレだけなら、市を出てもまだいけるよね……。」

でもよく考えてみよう。まだ小学生ではないのだ。

「あつ。」

本人も気が付いたようだ。

「」

また一旦停車

した。本人の予想外の事がおこった。トランクが、急発進したせい
で開いたのだ。 ガバン . . .

「チャンス！！」

と、思ったのだが、車は猛スピードで、しかも、いつの間にか高速
道路の真上だつた。無理だ。ここで飛び下りたら、助かつても、後
からくる車にひかれる。

「おいつー。トランクが開いてるぞ！――」

誘拐犯に見つかってしまった。でも、もしかしたら、コレもチャン
ス！？

「どこかで一時停車するか？」

ほら。不意をついて逃げるチャンス！！

「いや、いい。」

「だったらどうするんだ？？」

由来もどうするのか首をひねつた。

「どうするのかな？」

「お前は、とにかく急げ。」

「はい . . 。 でも。」

「でも？」

トランクが風に当たり、音を立てる。

「い、いいえ。なんにもねえです。」

「ならよろしい。」

ウイーン。窓の開く音がした。車の屋根の窓だ。

「まさか。」

彼？彼女？は、車の屋根によじ上り、由来に言つた。

「首。」

「はい？」

「首引つ込めて大人しくしてろ。」

由来が、元の体勢に戻つた瞬間、ガツン。と大きな音をたてて、ト
ランクの蓋が閉まつた。由来は、ちょっとした恐怖心におそれて
いた。うちにはお金はそんなにないわ。なのになんで私をさらうの

かしら。ほんの3ヶ月前に、田舎から、すこーしだけ町に出てきた

だけなのに。。。

車はどんどん進む。

こんな話は、少し信じがたい。でも、私の姉なら、あり得る。

車が止まった。大人しく待つていてけど。このトランクから、出す瞬間、このすきをついて逃げ出そうとした。すぐ逃げ出せる様に、軽くストレッチした。

「いいか。このあと・・・。」

「わかつてゐる。」

声が近づいている。チャラ。鍵を出す音がした。もう少し。もう少しで開く。はやくはやく。ドキドキと心臓が鳴る。ガチャッ。鍵を差し込む音。もうちょっと。後、ほんの少しで開く。トランクの隙間から、光が差し込む。10、9、4、3、2、1、

今だ！

由来は、絶妙なタイミングで飛び出して、相手の脇の間をすり抜けた。

「なつ・・・・！」

相手も、少しどまじつた。

「待て！！！」

由来は、茂みに隠れた。山の中の様だ。折れた竹やぶの中に隠れた。由来の目の前を”誘拐犯”が右往左往する。

「どこだあいつけ。」

不機嫌に足を踏みならす。

「俺に聞かないでくれ。」

「探せ。」

バキッと、竹をある。凄い力。

「はあはあ。」

ドキドキして息が荒くなる。ここから動かないと見つかるのは時間

の問題。動かないと。動かないと！…絶対に見つかる！…今相手は2人。

「どこだ。何か。まだ6歳だろ？なんでこんなにスパイ要素むき出しなんだよ。」

また枝を折る。

「探してくれよ。」

「試験もこの調子だつたら合格ラインだな。」

由来の隠れている竹の前で止まった。

「はつ。」

由来は、すかさず手で口を覆つた。

「日本と言つ国のために、スパイとして働け。」

「？」

「お前の選ぶ道はそれしかないんだ。」

それだけいうと、回し蹴りしたかと思うと、竹の枯葉がクルクルと回転しながら陽の光に照らされて^{きんいろ}黄金色に光りながら、空中を舞つた。

「来い。」

その人は、由来に手を差し伸べた。

第5章* 無人ビル（前書き）

今回は、ついに、ついに、香鈴がスパイの本部へ到着！…さて、無愛想な女の人と共に、何が待っているのか楽しみ！！

第5章＊無人ビル

まだ話がこれからと書つところなのに。道が悪くなつたと思つたら、停車しちやつたし、着いちゃつたし。

「すまないな。話の途中なんだが、到着だ。降りろ。」

相変わらずの命令口調。

「はい。」

私はなるべく素早く降りた。小石がごろごろ転がっている汚い空き地に、なんとも最悪な無人ビルがあつた。ここがスパイの基地？！と、思つたが、後で納得できる。

「来い。こっちだ。」

「あ、はい。」

ビルの周りを回る様な形で入り口に向かつた。『』の字型のビルで、所々にひびが入り、カビで黒ずんで汚れていて、窓ガラスはなんとか割れていらないものの、ほこりで真っ黒。少しでも触つたら、パリッと、音をたてて割れてしまいそう。

「着いた。」

玄関だ。ガラスのドアの壁に、比較的新しい機械がくつついていた。

「どこだっけな。」

少し時間をかけて、ポケットからカードを出した。

「ピ - - - 確認シマシタ。」

機械が喋つた。ドアのロックが解除された。

「先に入れ。」

ドアにはノブがないので、足で押さえている。

「ありがとうございます。」

「ふつ。」

意味深な短いため息をついた。

古いボロボロのロビー。滑りそうになる廊下。冷たい鉄のドアが

並び、暗い階段を上る。廊下をずっとずっと真っすぐ進んで、まん中の建物につくと、暗い螺旋階段を下る。少し明るいロビーに着いた。月明かりでうすすら照らされている。足音が響く。

「挨拶はしろよ。」

「？は、はい。（？）」

おんぼろなエレベーターの前にとまつた。ゴウンゴウンと、大きな音をたててエレベーターに入る。この建物は相当古い様だ。だって、エレベーターの場所をさす看板に、"自動昇降機" って書いてあるんだもの。ありえねー。ゴウ。ドアが重々しく開いた。中は、明るいけど、何か怖い。お化けでも出でやう。階の番号が点滅して、上へ上がる。

「ふう。」

ため息をついた。

「着いたぞ。」

また重々しく扉が開いた。そこには、信じられない光景が。

無人ビル 1（前書き）

香鈴は、スパイになります！！！本当に！！！

ドアの向こう側は、おんぼろビルとは思えない程、キレイで、かっこいい！－どんな風かつて？それはもう、一流会社のオフィスの様に洗練されていて、シルバー、ブラック、ホワイトの色で統一されていて、デスクやいす、パソコンやコップなんかの物は、アルミのシルバーがキラキラ光る。

「すゞーい。」

思わず声が出てしまった。床は、黒の大理石で、所々に白い大理石がラインを引いた。歩くと、コツコツと、良い音がした。オフィスの仕事をするスペースは、オシャレなデザインにカットされた曇りガラスで区切つてある。

「ぼやぼやするな。早く歩け。」

「す、すみません。」

廊下をまっすぐ行くと、すこし特別な部屋があつた。

「失礼します。」

女の人があつ拶した。

「ご、こんばんは。あ～え～。はじめまして。」

室内に入った。そこには、いかにもスパイの”お偉いさん”と、言う雰囲気を放つ大柄なおじさんがいた。

「はじめまして。ミス・香鈴。」

女の人は、頭を下げた。

「下がつてよろしい。ミス・今井。」

「はい。失礼します。」

ドアが静かに閉まつた。曇りガラスに映つた影が、遠ざかつて行つた。ああ。私一人にならなきや行けないのか。少し寂しくなつた。

「では、君が何故、ここに呼ばれたかは分かるかな？」

「はい。」

「では、今日から、日本のスパイとして働く事を誓つか?」

「.」

沈黙が流れた。

「私なんかで良ければ。」

「うむ。よろしい。ま、一夜にして大物スパイになる奴はない。
そこでだ。これから一ヶ月程、君にスパイの育成プログラムに参加
していただく。ええ、その、君はまだ学生かね?」

「はい。高校二年です。」

「うむ。そうか。まあ、大変だろうがよろしく頼む。」

「はい。」

「では、君に、同意書を書いてもらおう。」

紙とペンが渡された。立つたままで同意書にサインをした。長い同
意書だった。普通なら、例えばだけど、『あなたは、スパイになる
事を同意しますか?』と、言う程度だと思うが、死んだ時のためだ
らうか? 血縁関係から、聞いても良いんか??と、思う様な個人的
な事まで、1から10まで3ページに渡る同意書を書いた。

「書いたかね?」

「はい。一応全部うめました。」

「うむ。よろしい。」

同意書を渡すと、やつとソファーに掛けて良いと言われたので、遠
慮なく座つた。

5分後。かつこいい、アルミの薄い箱の様な物にカードと、データーピルを渡された。

「君に、徳竹隊員から渡されたと思うが、あのパソコンは、今日か
ら君の物だ。大切に遣いなさい。」

マイパソコン!!し、幸せだあ~。

「はい。ありがとうござります。」

「失礼します。」

怖い人、つまり、今井さんが私を迎えて来た。また廊下を歩いて、
車へと向かう。

「よかつたな。」

「はい。」

「今日からお前のプロベイショナー、つまり、先生の様な物に、私がなる。」

「はい。よろしくお願いします。」

「いらっしゃい。それと、自己紹介していなかつたな。」

「はい。」

「今井だ。よろしく。それから、田野。お前はスペイ名を決めなくてはならん。」

「名前、変えるんですか?」

「何か格好良い名前を . . . 。」

「そうだ。田立たない名前にしろ。ちなみに、男女の区別が付きにくい様にしろ。」

「んー。"野田ユウキ"なんてのはどうでしょうか?」

「よし。野田ユウキだな。帰つたら、忘れない様にパソコンに登録しき。」

「はい。」

階段を下りる。

「今日からこいつの世界では、野田ユウキになる。わかつたな。」

「はい。」

無人ビル 1（後書き）

今回のお話は、文章が多くなっちゃったかな。

「(^_^;)」

無人ビル2（前書き）

今回は、香鈴が慣れないスペイ名に戸惑いながら、スペイとして進みはじめようとします。

無人ビル2

翌日。学校で、少し寝不足になりながら授業を受けた。眠い。放課後の部活は、いつものメニューがきつく思えた。

「日野！…もつと早く！…みんなが迷惑するぞ！…」

「すみません！…」

私は水泳部。いつものメニューと言うのは、50メートル一本で、プル（手だけ）10本。キック（足だけ）10本。スイム（全部）10本、ウォーミングアップ・ダウン200メートルずつ。大会が近いので、リレーの練習なんかも合わせると、3500メートル毎日泳ぐ。

「おわり！…」

今日の練習が終わった。

「香鈴、今日調子出でなくない？」

「うん。ちょっとね。」

苦笑。

「今月から大会あるんだから。体調整えときなよ。」

「うん。」

私は、深いため息をついた。もう7月か。夏のオンシーズンしかないうちの部活は、大会が、夏にひつきり無しにある。21日の区大会を先頭に、大会だらけの夏が幕開け。そんな大事な時期なのに、スパイになっちゃったんだよね。

「はあ。」

また、深い深いため息をつく。今日から、スパイの育成がある。身体、もつかな？

夜10時。今日は、家路に着かず、駅へと向かう。ゆめつきまち夢月町で降りた。階段を下り、駅の南入り口で待つ。この間のボロボロワゴン車が、静かに私の目の前に止まった。

「こんばんは。」

「おう。」

挨拶をした。今井さんは、クールに決めたスタイルで、見とれてしまつた。いつも、ブラックのスーツに身を包んでいるのだ。見とれない人はいないと思う。

「野田。」

私は、運転手の人を呼んだのかと思った。

「野田。お前の事だ。」

「えつ？ はい。すみません。」

「なるべく早くこの名前になれるよ。」

「はい。」

今井さんは、かつこいいシルバーの手帳を開いた。

「連絡だ。」

パラパラページをめくる。

「今日から、私が、正式にお前の教官として就く事になった。」

「はい。」

「で、今日は、えーっと。これが。正式なデーターディスクを作成したり、訓練の過程の説明会があるし、お前の専門を、十日までに提出したい。ま、先の事だが、今日中に決めておいた方が楽だ。」

「はい。よろしくお願ひします。」

私は、今言われた事を頭の中で整理した。相変わらず、車内にはライトンが閉められていて、真っ暗なのだ。また気まずくなりながらも、昨日よりは、少し楽だった。

夜11時。やっと着いた。無人ビル。今思ったのだが、本当にすごい！ 光が全くもれていないので。あんなに明るいのに。

「ユウキ、どうした？」

「いいえ。何でもないです。」

一人で裏に回り、それぞれカードを通した。

「カードの通しかたは分かったか？」

「はい。少しまよったけど。」

「そうか。」

あの古いエレベーターの前に着いた。エレベーターは、重々しい音をたてながら上がつてくる。

「お疲れ様です。」

「い、こんばんは。」

中から、人が出てきた。予想外。

「今から任務か？」

「まあな。じゃ、行つてくるよ。」

「おう。」

今井さんが言つと、ドアが閉まった。同じスパイの仲間なのかと実感。ドアが開くと、昨日来た所で、また、いい音のする廊下を歩いた。突き当たりのお偉いさんの部屋には入らず、T字型になつた廊下の右に曲がつた。それから、大きな白いドアを開けるとマンガ喫茶の様に個室に区切られた部屋に來た。でもやつぱりスパイの隠れ家。個室のドアは、曇りガラスか、銀色のドアだつた。

「ユウキ、カードの番号は？」

「え？ ちょっと待つて下さい。」

私は、カードをポケットから取り出した。

「N1468。」

「そうか。」

もう少し歩くと、曇りガラスのドアの個室があつた。壁は、白。

「ここが、お前のオフィスになる。」

シルバーの文字で、番号がドア側の壁に印されていた。

「ありがとうございます。これから、私は、どうすれば？」

「パソコン持つてきたか？」

「はい。」

「配線につないで、データーピルの情報を見とけばいい。何か飲みたかつたら、この個室の集まりの部屋の中央に、コーヒーのセルフがある。それと、紅茶とレモンスカッシュがあるかな。」

「それだけかな？ と、私は思った。」

「11：40から、今日連絡した内容がある。」

「はい。」

「オフィスには、それ以降出ない事。

1・45には終わる。」

「はい。」

「また眠たくなりそうだ。」

無人ビル2（後書き）

次回は、訓練の日々！実際に私も同じ事をやってみたんですが、きつかった！溺れそうになった！！お楽しみに！！

第6章* プログラムスタート！（前書き）

香鈴の本名なんだつけ？

第6章* プログラムスタート！

個室は、オシャレで、明るかった。白を基調としていて、デスクはシンプルに、引き出しなどはなく、机の上に、本立てがあるだけだった。部屋の広さは、二畳半程の広さで、後ろには、棚があつた。暇なので、しばらくデーターに必要な事を書き込みながら、レモンティーを飲んでいた。香りが良くて、おいしいレモンティーだった。パソコンをいじっていると、時間になつたらしく、いきなり画面がかわった。データーピルなどは、抜く様にと指示され、しぶしぶ抜いた。

「今から始まるのか。」

「準備は良いですか？」

データーピルを抜くと、新しい画面が表示された。クリックすると、また画面がかわった。

「ロード中 . . .

7 / 4

1分立つと、画面がまたかわり、プログラムがスタートした。

「E s p i o n a G e s p y*」

文字が、次々に出てきて質問をしてきた。30分も質疑応答を繰り返した。パソコンの画面がかわり、休憩の表示をした。

「休憩 : 5 m i n」

「やつたー！休憩だあ！！」

私は部屋を飛び出し、走ってコーヒーサーバーのところへ行き、急いでレモンスカッシュを「ツップ」に注いだ。また、静かに走り部屋に戻つた。

「休憩 : 1 4 0」

よかつた。間に合つた。私はほつとした。ピーッと、音がして、また始まつた。

「ああ。疲れるな。」

「プログラム内容 . . .」

と、表示された。色々と、訓練について説明が。

「スリーマンセル（三人一組）制。」

までよ、私以外に2人一緒にプログラムに参加するつて事！？えー

つ！！

第6章* プログラムスタート！（後書き）

このお話と同時平行で新連載する予定です。

プログラムスタート！＊1

その他色々な連絡事項が、知られた。 深夜 0：00。今井試験官が、私のオフィスを訪れた。パソコンのプログラムが終了し、次は、三人一組のチームの発表のはず。このチーム決めは、E PGの内部調査で、事前に、私たちにランキングが付けてあるらしい。チームの力が均等になるように、すでに決められている。

「ユウ、ついて來い。チームの発表だ。」

「あ、はい。」

オフィスの電気を消した。ちょっと違うエレベーターに乗り、下へ降りた。また暗いボロボロの廊下を通つて、隣の塔へ来た。そして、ドアから入ると、少しボロボロな部屋に、数十名の受験者が、いた。空いているところに適当に座つた。それから数分経つて、チーム決めがあつた。

「ガール＆ボーイズ、こんばんは。チーム決めの方法は、知つての通り。で、まずは、ランキングを発表したいと思う。」

私は、この人たちの中でどれ位なんだろう？

「30名中、第30位、得剥田涼。だい29位、西田メイ。
．．．

まだ私の名前が出てこない。結構、上の様だ。 20位、18位、
14位、．、10位、．、

まだまだ私の名前が出てこない。かなり、上位の様だ。9位、7位、
．、5位、4位、3位、

「第2位、中原杏。第1位、日野香鈴！以上！」

は？何ですって？！

「次は、チームの発表。A班、安恵試験官．．．」

私は信じられなかつた。何かの間違えだ。つてゆーか、本名でランキング出すなよ。

「G班、日野、得剥田、中溝。」

私は、G班か。

「以上！各試験官について行きなさい。」

「はい。」

私は、今井さんを探した。居た！と、思つたら、他に2人の男子がいた。この人達と組むのか。

「よし、揃つたな。まず、奥に行こう。」

他のチームは、さつさと外に出て行つてゐるのに、なぜか、私達だけ、中に残つてミーティングをする事になつた。

「まず、自己紹介をしよう。私の名は、知つての通り、今井だ。今後は、”今井試験官”と、呼ぶ様に。わかつたな？」

「はい。」

「よし、じゃあ、ユウからいけ。本名と、スペイ名を言え。それから、年齢かな。」

「はい。えつと、私の本名は、日野香鈴。スペイ名は、野田ユウキ。17才よ。ええと、これから、色々とよろしく。」

今井試験官はうなずいた。

「次。」

「俺か。本名は、得剥田涼。スペイ名は、水野涼。年齢は、18。よろしく。」

「僕は、中溝真中。スペイ名は、中溝大地。よろしく。」

今井試験官はうなずいた。

「えつと、確か、涼とユウは、同じ高校だろ？」

「え？ そなんですか？」

「まてよ、得剥田つて . . . 。

「せせせせせ、先輩！？」

「こここここ、後輩！？」

やつぱり！知り合いだつた . . . ！

「顔見知りじゃないのは僕だけかな。」

中溝君が言った。

プログラムスタート!* 1 (後書き)

「こんにちは。作者です。いつも読んで下さって、ありがとうございます！」

今回で、やつと、20部分を迎えました！！

八(^\v^)/)

プログラムスタート*2（前書き）

今回、試験の最終日を迎えた香鈴達。 ちょっと頼りない中溝君は、
果たして、大丈夫なのでしょうか？

プログラムスタート＊2

あの夜から、気が休まらなかつた。夜はスパイの訓練。昼間の部活や学校生活で先輩に顔を合わせてしまい、時々授業中に徳竹さんのマナーの悪いメールが・・・。

そんなこんなで、夏休み。もうそんな生活にも慣れ、最初の頃悩まされていた寝不足も、平気になつた。今日もまた訓練がある。いつになつたら、任務が与えられるのだろうか？私も、その他の研修生達も、苛立ちが目立ち始めた。

「よし、みんな揃つてな。」

今井試験官は、また張り切つている。そして、手に持つてゐる”ブラックリスト”を取り出した。これには、今夜行う地獄の特訓のメニューが書いてある。

「今日は、ここか。よし。えー、みんな、今日はこの近くにある湖までランニングで移動！」
えーっ。と、言いたくなつたが、喉までもどした。

やつと、湖まで来た。重りの入つたコートを着かるなんて、どうかしてゐる。体が思う様に動かないし、膝より下に垂れたコートの裾の重りは、いつそう重たく感じる。

「野田さん、今日、アレですかねえ。」

中溝君が言つた。私達の他に、何チームかが見えて來た。総試験監督までいる。

「確実に、アレだね。」

私が言つた。

「みんな、集合！－」

総試験監督が、馬鹿でかい声で召集を行つた。

「今日は、みんなの中にも気づいた人もいるだろ？。今夜は、チー

ム対抗戦を行なう！！

やっぱり。1番になつても結局何にもないんだよねえ。

「あそこにある、島のよつたが湖のど真ん中にある。」

暗くて見えないよ。

「そこに、データタスクを置いている。それを取つて、ここまで戻つて来い。」

総試験監督は、でっかい旗を、地面にさした。

「それから、このマートは着用したまま。一人、ツールは三つまで。途中で、試験監督が、邪魔をする。制限時間は、1時間半。それは、始める。」

今井試験官が、電光掲示板のタイマーのスイッチを押した。

「おお、おい、いくぞ！！」

「ええーっ！…ちょっとまって。」

他のチームは、慌てて動き出したのだが、私達の班だけ落ち着いて話し合つた。

「こんな風に、三角形の形で進む。先頭に、田野…じゃなくて、野田。後ろに俺達がついて、試験官達から守る。各自、酸素ボンベと、通信器具を持って行く。」

「わかった。」

「OK。」

私達が、了解すると先輩は、うん、と、うなづいた。

「じゃあ、行動開始。」

私は、言わされた通りの物を持ち、データプログラムのセットを持つた。これならたくさん入っているし、三つまでの基準も満たしている。

「…。」

「ひづら、水野。前方、異常あるか？どうだ。」

「…。」

「異常ないです。どうだ。」

ビー・・・

「後方、左、何者かがついてます。どうぞ。」

中溝君の方向だ。ちょっと心配。私達は、5メートルの距離を保ちながら、進み、湖の地面から1メートル上をいく。ビー・。

警戒音がなった。中溝君の方からだ。

プログラムスタート* 3 (前書き)

中溝君は、助かるのでしょうか？

香鈴は、任務を成功させるのでしょうか？

先輩は、どう判断するのでしょうか？

『本当のスパイ』になるために、訓練を終えることが、出来るのでしょうか？？

プログラムスタート＊3

中溝君は、もがいて、私達に、先に行く様にと言つた。私は、先に行くかと迷う。

「さ、先に行つて下さい……」

ピー。。

「なんこと出来るかあ……何してん? 捕まつたのか? なら、倒せ! ！」

ピー。。先輩は、無理なことを言つていた。

「先輩!! 任務を優先して下さい! 」

ピー。。私は、スパイの訓練場に来てから、優先順位をつける癖が着いた。今やる事は、仲間の救助より、任務が優先と考えた。先輩は、どう思つているんだろう?

「野田! お前は、任務をやれ!! 僕達は、すぐ来る!!」

ピー。そんなことかと思つた。

「了解。」

私は、すぐ泳ぎ出した。中溝君は、足を掴まれていて、そのまま岸に戻されるところを、なんとか先輩が、救助し、私の援護に再び着こうとしていた。

その頃、私は 。

「ゲホッゲホッ。み、水飲んだあ。」

完全に、むせていた。私は、島の中心に行き、データーの「コピー」に取りかかっていた。プラグをつなぎ、折り畳みのパソコンを開いて、色々なコードを解読した。ここ数日間の訓練のノウハウを、フルに使い、訓練の日々からぬけて、ちゃんとした、『ほんとのスパイ』になるために。わたしは、「コピーしたデータを大切に持つてかえつて、途中で、試験官達に捕まらない様にと必死でもって帰つて来て、後で先輩達と合流。こんなに短くまとめているけど、本当に、本当

に、本当に、

辛かつた ! ! !

「合格。」

この二文字が言い渡された瞬間は、人生で、一番嬉しかった . . .

それから、三日程、連絡が来なかつた。先輩とも話したけれど、何も無い様だ。

ブルルルル。電話が鳴つた。

『日野香鈴。』

「はい、どちら様でしうか。」

私は、涼しげに言いつつ、内心、”任務が来た！！”と、かなり興奮していた。はつきり言つて、押さえきれないくらい、わくわくして いた。

「緊急だ。任務を言い渡す。一週間分の着替えと、パソコンや、その他のツールを忘れずに、本部に來い。」

「了解 . . . 。」

プログラムスタート*3（後書き）

最近、任務や、部活が忙しくて・・・。
汗。

第7章* 仮任務？（前書き）

今回は、少しショックな真実が発覚。香鈴は、何も思わず、心を捨てて、任務を優先することを要求されます。果たして、その任務内容とは？

第7章＊仮任務？

今日も、晩ご飯は、私が作る事になっていた。めんべくさこと何度も思つたけど、私以外に誰が作るのだろう。仕方ないのだ。私と姉の二人暮し。

「安売りだよ。」

「きやああ！！」

私は、おばさん達をはね除けて野菜を取り上げた。ここはスペイの力の見せ所。とれなくって悔しそうなおばさん達をよそに、私は、さつさと買い物をおえた。今日は、少しづくづくしていた。だつて、今日は、”初任務”の日・・・！

緊急だ。すぐ来い。と、言いつつ、予定が延期した。だから、今日私が任務に行く事になつていて。先輩も、ワクワクしていた。プルルルル。

「はい？」

『野田か？今日の九時に、夢月駅に来い。』

「はい。ゆめつき駅ですね？」

私は、買い物用のバックを肩にかけた。

『おくれない様にしろ。』

「了解。」

私は、電話を切ろうとした。

『あ、待て待て。お前の姉さんにも、この任務をばらすなよ。絶対にだ。』

「え。あ、はい。。了解しました。』

『姉には、合宿があると言つておけ。』

「は・・・はい。了解しました。』

私が言つと、すぐ電話が切れた。何故だらうか？私の脳裏には、三つの文字が浮かんだ。

”密告者”インフォーマー・・・。

「そんな、お姉ちゃんがインフォーマー何て、ありえないからー。私は、早歩きで家に戻った。

午後9：00。私は、夢月駅のホームに立っていた。先輩も、中溝君もいた。時間きつかりに来るとは関心だ。と、言ひながら、今い試験官も来ていた。スパイの心得。5分前でも、5分後にも来ない。その時刻ジャストにくる事。試験官とともに、午後9：07発特急の電車に乗った。切符は前もって渡されていた。

「あそここの席が空いている様だ。」

試験官が言った。私達三人は、空席に仲良く座った。

「今日は、”初”だな。私も、教え子と併に、仕事をするのは、実は初めてだ。」

試験官は、小声で言った。

「今日の内容は、どんなものなんですか？」

中溝君が言った。

「そうだな、野田。お前にはショックかもしけんが、お姉さんが、インフォーマーと発覚した。」
やつぱり か . . . 。
「気にすんなよ。」

先輩が言った。中溝君も、目配せした。

「ありがとうございます。良いです。密告者が、誰であろうと、機関に影響を与えていいのには、変わらない。身内の事より、任務を優先するわ。」

私は、そういった。みんな、感心した様子だった。でも、私は、自分でそう言い聞かせていた。

* _ _ (前書き)

今回は、香鈴が、スペイとして、すこじめの話で
す。

私達は、電車にゆらり揺られてやつてきた。まず、東京都本部にやつてきた。立派なオフィスビルが並び、私達は、怪しまれない普通の感じで、銀座の、あるデパートに入つた。

「デパートに何があるのかな？」

中溝君が、首を傾げた。

「さ、さあ？」

私は、先輩の方を見た。

「知らねえ。」

「だよねー。」

私達は、デパートの裏に来た。季節は、まだ夏。照りつける日射しは、厳しかつた。私達は、しばらく外で待たされた。毛穴がぱつく開いて、汗がだらだらと出た。今井試験官は、多分誰かを呼びに、クーラーのきいた、涼しい部屋に入った。私達は、もう暑くてたまらない、と、思つたときに、裏口の駐車場が音をたてて開いた。

「お前達、乗りなさい。」

今井試験官が、窓から声をかけた。私達は、急いで乗つた。（暑いから。）

1時間後。私達は、涼しいクーラーのきいた車の中で、任務を着々とすすめていた。私は、スパイとして、精神的に育つしていく事が、わかつた。みんなで、分担して、仕事をテキパキとこなす。今井試験官は、表の顔は、デパートの店員だそうだ。そして、しばらくして、渋谷のオフィス街についた。

姉の雑誌編集事務所の前で、車を止めた。今は、お昼休み。姉が、会社から出てくるのを、待つた。張り詰めた空氣の中で、事務所の窓の大きな雑誌の広告が、その場にそぐわなかつた。

姉が出てきた。今日は、行動監視だけだつたが、私は、ある事を心の底から思った。

姉を捕まえてみせる。他の誰でも無い、私が・・・・・。

* —— (後書き)

おひやじぶつです！

作戦決行。（前書き）

いよいよ密告者と判明した姉を追いつめる。絶対、私の手で姉を捕まえると決心する香鈴。果たして、運命やいかに・・・！？

作戦決行。

私達は、姉の後を追つた。姉は、不自然な行動を取つた。お弁当を買つたあと、何故か公衆電話からPCを使つたのだ。それから、数分後。電話が鳴つた。姉は、電話を取ると、20秒程度の簡単な会話をして、すぐに切ると、会社へと戻つて行つた。

「電話の通話履歴を調べよう。」

中溝君が言つた。

「盗聴器や逆探知機を仕掛けないんだから、無理だよ。」

私が、否定する。でも、もしかしたら。と、みんなが思つたので、電話ボックスから、情報を引き出してみた。すると . . . 。

「0348 - 687 - 1234 . 03 - 3546 - 1717 . . .
0000 - ×× - ×2×4××6 . . . 」

いろいろな番号の中から、で示された番号があつた。多分これは、『密告者』と言つ、仕事先の番号だろつ。姉への疑いが、ますます広がるばかりだった。私は何度も姉を捕まえる事ばかりを考えていた。

そして、夜。中溝君が裏に回つた。ここは、とある公園の中。出入り口は、一つ。しかし、住宅に囲まれたこの大きな公園は、木を登つて、垣根をまたごせば、一気に道に出る事が出来る。その一番出入りしやすい場所に見張りをつけた。会社の前には、先輩がいて、公園へ行く道の途中には、試験官がいた。そして、私は . . . 。
「うー、なんか、蒸し暑いなあ。夏の夜の公園つてのは。」

私は、制服を着て、まるで、『あら、偶然会つたわね。』と、言つ感じでふるまうため、公園のど真ん中にいた。今、ふと考えたのだけど、なんのために旅行道具を持ってきたんだろう . . . ?

「うー、集中集中。」

私は、身体を揺すつた。それから何時間と待つた。しかし、作戦失

敗。何時間経つても来ない。その時だった。携帯が鳴った。

『おい、聞こえるか？お前の姉さんは、今、ホテルに入つて行つたぞ。』

「はあ？！』

『落ち着け。中溝にも言え。今ホテルの位置をメールで表示すつから、2人で向え。』

「は。はい。』

私は、信じられなかつたが、またまた自分に言い聞かせた。姉は、もう20歳を過ぎているんだし、少々の事で……ねえ……。本音は、密告者と言われたときよりも、結構イタイ。。

「中溝くーんっ。行こう。』

私は、草の中にいる彼を引つ張りだして、走つて向かつた。遠くもないところの普通のホテルだつた。ホテルの裏に回ると、試験官がもういて、私達に手招きした。地下の駐車場に、黒いワゴン車がとめてあつて、その中には、既に仕掛けられたカメラと盗聴器が、この車に、情報をもたらしていた。

「きたか。別にやましい事はしちゃいないぜ。』

私は、ちょっと安心。

「今、取り引きをしている。』

「そう。でも、どうやつて部屋に取り付けたの？』

私は、試験官の顔を見た。

「うむ。それは、かんがえればわかるだろ？』

ひと

ちょっとカタコトの言葉で返された。やっぱり可愛くない女性。私は、モニターを見た。姉が何かいろいろと話す。

「よし。そろそろだ。お前達、準備しろ。現場を押さえるぞ。』

「はい。』

今井試験官は、今井情報部員の顔つきに変わつた。私達は、たれつと道具をつけ、ホテルへ乗り込んだ。

『じちら、A。準備OK。』

『じつちもOKだ。』

私も、配管を必死でのぼり、耳に手を当てる。

「えー、こっちも良いです。OK。」

『では、みんな頑張れよ。今から作戦決行・・・!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1468a/>

espionage+1

2010年10月28日08時15分発行